



災害時に貢献できる中学生の育成 ～地域との絆を大切に～



東京都荒川区立南千住第二中学校
副校長 松田 公好

東日本大震災における「釜石の奇跡」が示すように、災害時には率先して地域に働きかけ、防災・減災活動に貢献できる中学生が必要であり、その育成は地域の防災・減災に不可欠であると感じています。本校では平成24年5月、このような中学生の育成を目的として「レスキュー部」を創立し、生徒の防災意識を高めるとともに防災活動を通して地域に貢献する人材の育成を目指して活動してきました。

中学生の防災意識を高めることは、10年後20年後には地域の防災力の確実な向上につながるものと期待しています。

1 活動について

活動は「防災・減災関連活動」と「地域への貢献活動」の二本柱です。地域への貢献活動は防災、減災関連活動の充実につながるものと考えています。地域への貢献活動を継続することにより地域の人と触れ合う機会が増えます。地域の人との年代を超えたつながりができるわけです。日頃から地域の人々とのつながりをもっておくことは防災、減災に非常に大きな力となるはずです。

このような考えで私たちはレスキュー部の活動の充実を図ってきました。以下に現在のレスキュー部の主な活動をご紹介します。

①レスキュー部防災訓練

毎年夏休みに日本赤十字社や地元の消防署、区の防災課等と連携して学校が避難所となることを想定した防災訓練を実施しています。

今年度は部員約170名が参加し、



簡易トイレの組み立て

3グループに分かれて、「ハイゼックスの炊出し」「D級ポンプ操作」「普通救命講習」「高齢者避難誘導」「避難所機器の組み立て・操作」「防災クロスロード（災害対応カードゲーム）」を行いました。

②絆ネットワーク活動

平成25年7月に始めた活動です。部員2人～4人が1チームとなり、毎月学校だよりや学校行事の案内を、あらかじめ登録していただいている各高齢者宅（現在30世帯が登録）に持参し、直接手渡ししてコミュニケーションを図るようにしています。

こうして日頃からレスキュー部員と地域の高齢者の方々が顔見知りになっておくことにより、災害発生時に円滑な支援ができると考えています。この活動は日頃の高齢者の方々の安否確認にもなっています。



絆ネットワーク活動

③保育園児避難誘導訓練

平成26年からは近隣の保育園と連携した共同の避難訓練を行っています。レスキュー部員が保育園に出向き、園児の手をひいて本校体育館まで避難誘導します。そして体育館では部員が園児の遊び相手となり、触れ合う時間を持ちます。この訓練で園児とも顔見知りになっておくことができ、避難所での円滑な支援に役立つ

と考えています。



保育園児避難誘導訓練

④その他の活動

柱の一つである「地域への貢献活動」として様々な地域行事にボランティアとして参加しています。(町会の防災訓練、障害者運動会、小学生対象行事の手伝いなど)

2 活動による生徒の変容

①自信と誇り

ほとんどの部員が普通救命講習を受講して技能認定証を受け、防災機器や消火機器の扱いを体験するなどしており、防災に関する知識・技能の習得は進んでいます。このため部員は自信と誇りをもって活動するようになりました。

②防災意識の向上

活動を通して確実に防災意識が向上したことを実感できるようになりました。部員数(生徒全体に占める割合)は年々増え続け、現在では約240名(全校生徒の68%)がレスキュー部員です。このため毎月の避難訓練では、教員の指示がなくても身の安全の確保から避難までを整然と行えるようになりました。

③地域貢献意欲の向上

地域行事へのボランティア参加を続け、地域から感謝されるなどの体験を通して、徐々に地域貢献意欲も高まってきました。雪の日に自主的に雪かきをするなど、具体的な行動を起こせる部員も現れるようになりました。

④心の育成

高齢者宅を訪問して体を気遣う声をかけた

り、保育園児を誘導して園児と触れ合ったりすることで、思いやりや労わる気持ちなどの優しい心が育まれていることも感じます。

3 今後の課題

活動を通して様々な課題も見えてきました。

絆ネットワーク活動では、登録していただく際に高齢者の方のお名前以外に住所や電話番号といった個人情報を集めることとなります。この管理には細心の注意を払う必要があります。

また、部員数が増えるにしたがって、いくつかの多人数ゆえの問題点が表れてきました。それは部員を一堂に集める場所の問題と部員間の意識、意欲の格差です。240名を超える部員を一堂に集められる場所は校内には体育館しかありません。他の部活動やその他の活動との調整が困難で、学年別に活動するなどの様々な工夫を試みている段階です。

部員数が増加するにつれ、部員間の意識や活動に対する意欲の差が大きくなってきました。これについては仕方のない面もありますが、意欲的に活動して頑張っている部員をきちんと評価して認めてやるのが大切であると考えます。

他にも顧問の教員の確保や教員の負担感の軽減など、今後学校として対応していくべき課題もあります。

4 まとめ

上記のような課題はありますが、子どもたちが目を輝かせ、生き生きと活動する様子を見ると、是非様々な工夫をしながらこの活動を長く続けていきたいと思えます。

そして、10年後、20年後に子どもたちが親となり、自分の子どもにもここで培った防災意識や知識、技能が受け継がれていくことを期待しています。

本校の教職員一同、この活動が災害に強い街づくりの第一歩となることを強く望んでいます。